
サンスクリット語文法ノート (11)

yoṣan- と yoṣā-

松浦 高志

1 はじめに

yoṣan- (*VGS* §90) と yoṣā- (*ŚBI*.2.5.16 et al.) 「(若い) 女性」は、どちらも同じ意味をもち、語源も同じであるが、違う語幹をもつので別の単語ということになる。

一般に (ほぼ) 同じ意味で同じ語源をもつ単語に、子音語幹のもの (この場合 -an- 語幹) と母音語幹のもの (この場合 -ā- 語幹) があるとき、たいていの場合は子音語幹のものが先にあり、母音語幹のものはそれから派生した可能性が高い。またその逆の可能性は少ないと考えられる。

2 -an- 語幹名詞と -ā- 語幹名詞

-an- 語幹名詞はほとんどが男性か中性で、女性のごくわずかである。さて、-n- 語幹名詞の単数主格形は -ā で終わるが、(男性名詞や中性名詞とは異なり) 女性名詞の場合、この -ā は (-an- 語幹に由来するのではなく) -ā- 語幹に由来するようにも見える。したがって Wackernagel は「-an- 語幹に由来する単数主格形の -ā が再解釈され、-ā- 語幹になった」¹ と説明している。同様の名詞に *kan(i)yan- があり、同様に Mayrhofer も「-ā という

¹ „Durch Umdeutung des NSg. auf -ā werden an-Stämme zu ā-Stämme“ (*AiG* II-2, §148.a [S. 263]).

語幹は、より本来的な *kan(i)yan- の単数主格形 °yā- にもとづいている」² と説明している。実際、kanyās (nom. pl., RV+), kanyāsu (loc. pl., RV+) といった -ā- 語幹の曲用形が二次的に作り出されている。女性名詞である -an- 語幹名詞の代表例は yoṣan- と *kanyan- であるが、その他の若干の例は Macdonell, *Vedic Grammar*, §326.a (p. 203) にある。

3 古い語幹にもとづく曲用形

二次的につくられた語幹がもっぱら用いられる場合でも、そのもとになった本来の語幹の曲用形が、特に古い文献の中に残っていることがある。実際 kanyā- には単数対格形に kanyānām (RV VIII.35.5) があり (*EWAia* s.v. & *AiG* III.112), これはもともと *kanyān-ām だったものが、-ā- 語幹の単数対格形からの類推で最後の音節の ā が長くなったものと考えられる。また複数属格形には kanīnām (RV II.15.7 et al.) があるが、これは *kani-h₃n-óh_xom に由来すると考えられる。また、単数具格形に kanīnā (ŚrSū) < *kani-h₃n-éh₁ がある。最後の二例は以下で説明する Hoffmann 接辞と関係している (接辞の -an- (< *h₃on-) が零階梯になり、接辞の -an- にもともと含まれていた喉音が消失することにより *kani- の i が延長されている)。

4 Hoffmann 接辞

以上で yoṣan- と yoṣā- の関係についての一応の説明は尽きていることになるが、Karl Hoffmann の名前が出てきたので、Hoffmann 接辞について扱わないわけにはいかない。またそれが -an- 語幹名詞全体の理解にもつながるので、以下で簡単に見てみよう。

² „der Stamm °yā- beruht auf dem NomSg °yā eines ursprünglicheren *kan(i)yan-“ (*EWAia* s.v. kanyā).

「……をもつ」を表す接辞は多数あるが、印欧祖語で **-h₃én-/h₃n-* となるものは一般に「Hoffmann 接辞」として知られている³。ただし Hoffmann の名は明示されないことも多い。EWAia s.v. *kanyā* では「所有を表す形態」(Possessivbildung)と言及されており、Gotō, *Morphology* では、本文中では Hoffmann の名は挙げられず、索引でのみ HOFFMANN's suffix と言及されている (p. 175 右欄中央)⁴。

5 Hoffmann 接辞と -an- 語幹

さて、Gotō, *Morphology* は、サンスクリット語 (ヴェーダ語) の非常に複雑な語形変化をわずか 200 頁弱で見事に説明したものであるが、それを裏付けているのは、(1) 母音交替 (Ablaut) とアクセントの交替 (pp. 7–8), (2) Brugmann の法則 (p. 84 [Th. 3.3], p. 128), (3) 喉音 (laryngeal) 理論 (p. 172) の三つのすべてあるいは任意の組み合わせを用いれば名詞と動詞の両方の語形変化を基本的にはすべて整合的に説明できる、という考え方である⁵。

この考え方は、特に -an- 語幹の (男性) 単数対格形を説明するときに役立つ。まず、*rāj-an-* 「王」について (VGS p. 68), 単数対格形は *rāj-ān-am* のように、強語幹では語幹末が -ān- になると学ぶ。ただし実際には '*pūṣ-án*, a god, and *yóṣ-an* woman retain short a; *ukṣ-án* ox and *vṛṣ-an* bull fluctuate between a and ā' (VGS p. 68) とあるように、語幹末が、(a) 常に -ā- になる場合、(b) -ā- と -ā- の両方ある場合、(c) 常に -ā- になる場合 (Lanman は

³ Hoffmann, „Possessivsuffix“ の 381–382 を参照。

⁴ 重要概念を表す単語が、本書では索引にのみ現れることがあることについては、堂山、書評、75 を参照。

⁵ 堂山、書評、77 での的確に説明されている。

表 1 -an- 語幹の分類 (Gotō, *Morphology*, 38–43)

	Type 1	Type 2	Type 3	
	*-én-/-n-	*-on-/-n-	*-h ₃ én- (-h ₃ ón-)/-h ₃ n-	
sg.	hysterodyn.	amphidyn.	hysterodyn. (< amphidyn.?)	
N.	ukṣ-ǎ [< *h ₂ uks-é(n)]	tákṣ-ā [< *tétk-ō(n)]	yúvā [< *h ₂ ǐéu-h ₃ ō(n)]	kanyā (< kaniyā) [< *káni-h ₃ ō(n)]
Ac.	ukṣ-án-am [< *h ₂ uks-én-m̄]	tákṣ-ān-am [< *tétk-on-m̄]	yúvān-am [< *h ₂ ǐéu-h ₃ on-m̄]	*kaniyán-am [< *kani-h ₃ én-m̄]
G.	ukṣ-ṇ-ás [< *h ₂ uks-n-és]	tákṣ-ṇ-as [< *(e)tḱ-n-és]	yūn-as [< *h ₂ ǐu-h ₃ n-és]	(pl.) kanīnām [< *kani-h ₃ n-óh _x om]

「tákṣān- の強語幹が短い ǎ をもつ例を見つけることができなかつた⁶」と述べている), の三つがあることがわかる。

-an- 語幹の由来は表 1 のように考えられている。単数対格形は, Type 1 では *-én-m̄ に由来するので -án-am となる一方で, Type 2 では -on-m̄ に由来するので, 「開音節に含まれる *o は, インド・イラン語派では ā で現れる」という Brugmann の法則により -ān-am になる。したがって ukṣ-án-am (acc. sg.) は Type 2 からの類推 (analogy) である。

Type 3 は基本型 (maintype) の yúvan- 「若い」型と, 派生型 (subtype) の kaniyā- 「(若い) 女性」型があり, (母音交替とアクセントの交替について若干不明な点があるが) 単数対格形は, yúvan- 型では語根にアクセントがあり, 接辞が o 階梯になる一方, kaniyā- 型では接辞にアクセントがあり e 階梯になると考えると, yúv-ān-am と *kaniyán-am という形をうまく説明できる。母音交替により生じた開音節の *o は, Brugmann の法則によ

⁶ 'From the stem tákshān I can cite no strong from with ǎ' (Lanman, 'Statistical', p. 523.C).

表2 母音交替・アクセントの型の一部 (Gotō, *Morphology*, 8 を改変)

		強語幹	弱語幹
proterodynamic	語根・接辞移動型	R(é)-S(Ø)-E(Ø)	R(Ø)-S(é)-E(Ø)
amphidynamic	語根・語尾移動型	R(é)-S(Ø)-E(Ø)	R(Ø)-S(Ø)-E(é)
hysterodynamic	接辞・語尾移動型	R(Ø)-S(é)-E(Ø)	R(Ø)-S(Ø)-E(é)

り \bar{a} で現れるが, $*h_3$ の音質変化作用 (colouring) により生じた $*h_3e > *h_3o$ に含まれる $*o$ は, 開音節であってもインド・イラン語派では \bar{a} で現れると考えられているからである (e.g. $*kani-h_3\acute{e}n-m > *kani-h_3\acute{o}n-m > *kani-y\acute{a}nam$, したがって Brugmann の法則の例外)⁷. 母音交替とアクセントの交替については表2参照. なお表2において, R は語根 (Root), S は接辞 (Suffix), E は屈曲語尾 (Ending) を表し, Ø は零階梯を表す.

6 単数主格形 $y\acute{o}\bar{s}\bar{a}$ のアクセント

さて, 単数主格形の $y\acute{o}\bar{s}\bar{a}$ 「(若い) 女性」(ŚBI.3.1.9 et al.) は, $-an-$ 語幹の $y\acute{o}\bar{s}an-$ の単数主格形とも考えられるし, $-\bar{a}-$ 語幹の $y\acute{o}\bar{s}\bar{a}-$ の単数主格形とも考えられる. またアクセントについて, これが $y\acute{o}\bar{s}an-$ の単数主格形であると考えても, あるいは $y\acute{o}\bar{s}\bar{a}-$ の単数主格形であると考えても, どちらでも説明できる. あるいはむしろ, 「 $-an-$ 語幹に由来する単数主格形の $-\bar{a}$ が再解釈され, $-\bar{a}-$ 語幹になった」と考えられるから, アクセントをもつ音節がどちらでも同じであることは当然であるとも言える⁸.

$y\acute{o}\bar{s}an-$ の曲用形もそれぞれ最初の音節 ($y\acute{o}^\circ$) がアクセントをもつが,

⁷ Gotō, *Morphology*, 42 n. 121. なお, $*h_1e > *h_1\bar{e}$, $*h_2e > *h_2a$, $*h_3e > *h_3o$ という, 喉音による音質変化作用は, ギリシア語ではそのまま現れる (それぞれ ε [ĕ], α [ǎ], o [ō]) が, サンスクリット語ではすべて a (または \bar{a}) で現れるために判別が難しい.

⁸ 注2参照.

もともとはそうではなく、類推 (analogy) によってそのようになったと考えられる。なぜなら *-an-* 語幹名詞のアクセントはもともと一般に移動していたと考えられるからである (第5節)。

語源が明確でないため (*EWAia* s.v. *yóṣā-*), *yóṣan-* がどの型に由来するか明確に記した文法書等は見つけることができなかったが、*-an-* 語幹名詞はほとんどが男性名詞か中性名詞であり、女性名詞はごくわずかであることを考慮すると、同様に *-an-* 語幹名詞であるのにもかかわらず女性名詞である **kan(i)yan-* と同じ型 (Type 3 の派生型) であると仮定することができる。すると単数主格形は語根が強階梯 (*guṇa* に相当) でアクセントをもつ *yóṣā* となり、これから *-ā-* 語幹名詞の *yóṣā-* が派生したと考えることができる。一方、単数対格形は **yuṣán-am* のような形が想定されるが、これは *yóṣan-* から派生した *yóṣānā* (RV V.52.14, nom. sg.) と比較できる可能性がある。なぜなら、単数対格形の *kanyánām* (RV VIII.35.5) は、もともと **kanyán-ām* だったものが、*-ā-* 語幹名詞の単数対格形からの類推で最後の音節の *ā* が長くなったものと考えられるからである。すなわち **yuṣán-ām* が *-ā-* 語幹からの影響で **yuṣán-ām* になり、それから単数主格形をつくって **yuṣán-ā* になり、さらに本来の単数主格形である *yóṣā* からの類推で *yóṣānā* になったと考えると説明できる。もともと『リグ・ヴェーダ』では、*yóṣānā-* の単数対格形である *yóṣānām* が 6 回用いられているから、類推によってアクセントも最初の音節に移った形の方がより頻繁に用いられている⁹。

yóṣan- (*yóṣā-*) の語源ははっきりしないが、仮に *yúvan-* 「若い」と同じ **h₂ieṷ-* であるとする¹⁰, *yóṣan-* は *-s-* で延長したあと *-an-* を付けたもの

⁹ Macdonell, *Vedic Grammar*, §374 Sing. A (p. 263). *yóṣā-* の単数対格形である *yóṣām* も 7 回用いられている。

¹⁰ „Ob mit *yúvan-* (und damit letztlich mit *āyu[s]-*, *yóṣ[-]*) zu verbinden? ... Auch das Ver-

であるということになる。すると単数主格形は $*h_2j\acute{e}u-s-h_3\bar{o}(n) > y\acute{o}ṣ\bar{a}$ である一方、単数対格形は $*h_2ju-s-h_3\acute{e}n-m > *yuṣ\acute{a}ṇam$ 、複数属格形は $*h_2ju-s-h_3n-oh_xom > *yuṣ(i)n\acute{a}m$ のような形が想定される。このうち $*yuṣ\acute{a}ṇam$ という形は非常にまれな $y\acute{o}ṣ\acute{a}ṇ\bar{a}$ という単語に残っている可能性があるが（「化石化」していると言うことがある）、 $*yuṣ-$ という弱語幹を $y\acute{o}ṣ^\circ$ という強語幹で置き換えた $y\acute{o}ṣ\bar{a}-$, $y\acute{o}ṣ\acute{a}ṇ\bar{a}-$ という形の方が一般に用いられていると言える。 $-an-$ 語幹名詞ではこのような一般化が起こることがしばしばあり、たとえば $y\acute{u}van-$ の単数主格形 $y\acute{u}v\bar{a}$ ($< *y\acute{a}v\bar{a}$)、単数対格形の $y\acute{u}v\bar{a}nam$ ($< *y\acute{a}v\bar{a}nam$)、単数属格形の $y\acute{u}nas$ ($< *y\acute{u}n\acute{a}s$) は、語根を（むしろ）弱階梯のような形にし、しかしアクセントは常に語根音節がもつように一般化した語幹が用いられている¹¹。

凡例

- + 以降.
- 語形の一部省略.
- *A A は想定形.
- B < C B は C に由来.
- D > E D は E に変化.
- * \acute{i} 印欧祖語の子音化した $*i$ (サンスクリット語の y に対応).
- * \acute{m} 印欧祖語の母音化した $*m$.
- * \acute{u} 印欧祖語の子音化した $*u$ (サンスクリット語の v に対応).
- AiG* Wackernagel et al., *Altindische Grammatik*.

h\~alt\~nis der ved. St\~amme $y\acute{o}ṣ\bar{a}-$, $y\acute{o}ṣ\acute{a}ṇ-$ (sekund\~ar $^\circ aṇ-\bar{a}-$) und $y\acute{o}ṣ\acute{i}t-$ zueinander ist nicht aufgekl\~art“.

¹¹ 本ノートの前 1-5 節は 2023 年 5 月 15 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習 III」(東京大学文学部)での発表資料「 $y\acute{o}ṣ\acute{a}ṇ-$ と $y\acute{o}ṣ\bar{a}-$ 」, 第 6 節は 2023 年 11 月 20 日の「印度語学印度文学演習 IV」での発表資料「 $y\acute{o}ṣ\acute{a}ṇ-$ と $y\acute{o}ṣ\bar{a}-$ のアクセント」をほぼそのまま掲載したものである。

EWAia Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*.

VGS Macdonell, *Vedic Grammar for Students*.

ヴェーダ文献の略号

RV Ṛgveda(-Saṃhitā). **ŚB** Śatapatha-Brāhmaṇa.

ŚrSū Śrauta-Sūtra.

参考文献

Gotō, T., *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013).

Hoffmann, K., *Aufsätze zur Indoiranistik* (Wiesbaden: Reichert, 1975–92).

———, „Ein grundsprachliches Possessivsuffix“, in: *Aufsätze*, ii.378–383
[= *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 6 (1955), 35–40].

Lanman, C. R., ‘A Statistical Account of Noun-Inflection in the Veda’, *Journal of the American Oriental Society*, 10 (1880), 325–601.

Macdonell, A. A., *Vedic Grammar* (Strassburg: Trübner, 1910).

——— *A Vedic Grammar for Students* (Oxford: Clarendon Press, 1916).

Mayrhofer, M., *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* (Heidelberg: Winter, 1992–2001).

Wackernagel, J., Debrunner, A., et al., *Altindische Grammatik* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1896–1964).

堂山英次郎, 書評 : Gotō, Morphology, 『歴史言語学』 3 (2014), 73–84.

<https://gototoshifumi.jimdofree.com/>